

第5章

田中里子にみる複合キャリアの形成過程

真橋 美智子

はじめに

田中里子は全国地域婦人団体連絡協議会（以下全地婦連）の初代事務局長として戦後日本の消費者運動、平和運動をリードしてきた。1948年に東京都地域婦人団体連盟（以下東京都地婦連）創設とともにその事務局長となり、1952年に全地婦連結成後は同事務局長を兼務し、以来一貫して地婦連とともに歩み、キャリアを形成してきた。それは全地婦連の事務局長を退任する際、「地婦連は私の生きがい。そして、私を育ててくれたところ」（「毎日新聞」2007. 5. 23）と述べていることからもうかがえる。

本稿では、田中里子の消費者運動、平和運動を中心としたキャリアの原点を探り、職業と社会活動両面にわたる複合キャリアをどのように形成してきたか、里子が生涯をかけた地婦連での活動を通して検討する。

田中里子のキャリア形成に関しては、先行研究がほとんどない。地婦連との関係でふれているのは、金森トシエ『人物婦人運動史——明治・大正・昭和のあゆみ』（1980）、小林嬌一「日本の消費者運動史 地婦連の歩みと田中里子」（1996）などにとどまる。そこで本稿では、新聞や雑誌に掲載された本人への取材記事などを手がかりとして田中里子の複合キャリアの形成過程を探り、その特徴について考察する。

1 田中里子と消費者運動への道

戦時下の実践女子専門学校時代

田中（旧姓渡辺）里子（以下里子）の生い立ちはほとんど知られていない。本人の語るところによると、1925（大正14）年10月7日、東京の京橋で生まれた。家族や小学校、高等女学校時代については明らかにされていないが、幼少期から日本は戦争への道を進み、小学校、高等女学校時代には日中戦争、太平洋戦争と戦争が拡大し、深刻さを増し、学校教育も戦争の影響を強く受けた時期にあたる。ここでは実践女子専門学校時代以降について述べたい。

里子は1943（昭和18）年4月から45年9月まで、私立の実践女子専門学校の国文科に在学した。実践女子専門学校（現・実践女子大学）は1925（大正14）年に下田歌子により設立された。下田歌子は実践女学校を起点として、女性の自立、自営を目指す特色ある教育を展開した。その中には今日のキャリア教育も含まれる。「学問は、机上のみならず、実地に用いなければ役立たず」とも説いている（国立女性教育会館・飯塚 2008）。しかし、里子が入学した頃は、教育の軍事体制化が徹底され、43年の後半頃からは戦時動員体制もより強化され、本来の専門学校としての教育も徐々に実施できない状況となっており、下田歌子の教育理念がどの程度伝えられたか定かではない。在学中に女子専門学校の修業年限も3年に短縮された。

里子は専門学校の2年生から3年生にかけて、学徒動員で東京・赤羽の陸軍造兵廠で風船爆弾づくりを経験したことを取材などでしばしば語っている。小林（1996）によると、日本陸軍が製造・使用した風船爆弾は約9300個で、そのうち約1000個がアメリカ大陸に到達したとされる。この爆弾づくりの経験が、その後の里子の戦争への憎悪、平和を願う強い気持ちにつながっている。

1945年の5月に京橋の生家が空襲で焼け、一家は世田谷の借家に疎開した。6月からは学校に戻されたが、残された道はその頃編成された国民義勇

隊女子隊員として本土決戦にのぞむことであった。そして8月15日を迎えた。風船爆弾づくりは女子学生たちの体をむしばみ、里子も寝たり起きたりを繰り返したが、幸いにも生きのびることができた（「毎日新聞」1985. 4. 12）。敗戦の混乱の中、9月には実践女子専門学校を繰り上げ卒業となり、その後の生き方の模索が始まる。

敗戦後の自分探しと生田花世との出会い

専門学校卒業後、「心の整理もつかないままにぼんやりしておりました。しかし、1ヵ月くらい経ってから、これからは世のため人のために生きるのは絶対いやだ、自分のために生きたいと、はっきりそう思いました。だから、人のための仕事というより、まず自分がいいと思う仕事でなければイヤだという感じでした」（小林 1996）。生まれた頃から戦争への道をひた走り、徹底した軍国主義、国家主義的な教育の中で、「軍国少女ですごした日々を、私自身のためにどう取り戻したらよいか、暗中模索していた」（「京都新聞」1981. 2. 14）。里子にとって、敗戦はそれまでの価値観を180度転換させるものであり、同時に自分を見つめなおす、いわゆる自分探しの始まりであったと思われる。

その頃、疎開先近くの玉川電車（現在の東急世田谷線）の松陰神社前駅の線路際に「松花塾 詩や歌の勉強をする方はどうぞ 生田花世」と書かれた粗末な看板を見つけた。在学中、勤労働員に明け暮れる生活を送っていたため、せめて少しでも歌の勉強がしたいという気持ちで生田を訪ね、10月には塾生第一号となった。ちなみに生田花世は『青鞥』の同人で、女性解放運動にもかかわった徳島県板野郡出身の詩人、小説家である（芳賀他 1998）。生田のメモに「たった一人の松花塾の塾生渡辺里子。かわいらしい。一人が百人を兼ねるこの少女に感謝」と書き残されており、生田が里子に何らかの可能性を見出していたことがうかがわれる。それから塾生として週に1、2回生田の自宅に通い、『古事記』を読み、生田に解説してもらったという。（「徳島新聞」1996. 12. 13）

Ⅱ 複合キャリアの形成過程

生田は里子に詩や歌の勉強だけでなく、社会の勉強も必要だということ、多様な分野で活動する知り合いの女性たちに紹介している。その中で山高しげりと出会い、市川房枝、竹内茂代など女性参政権獲得運動の運動家たちとも出会ったのである。しかし、里子はすぐに女性運動に関心を抱いたわけではなく、松花塾では古典を読んで過ごし、将来は女学校の国語教師になりたいと漠然と考えていた。1946年4月、女性が初めて参政権を行使した総選挙に女医の竹内茂代が立候補した。生田に「社会勉強のため」といわれ、門下生全員（3人）がその選挙運動の手伝いをするようになった。しかし、3人とも女性運動に全く関心がなく、区役所を回って有権者名簿を写す単調な仕事に飽きると、公園のベンチで文学論をたたかわすこともあり、能率は上がらなかった。そのため、事務所の事務長だった山高しげりに何度も叱られた。こうした体験の中で、里子は間近で見た山高の仕事ぶりに敬服し、強く印象づけられ、後に山高の仕事を手伝うようになるのである（「毎日新聞」1982. 9. 20夕刊）。

女性運動への道筋

選挙運動の手伝いから数ヵ月経過した1946年の9月、生田に連れられて教師としての就職先紹介のお願いに山高しげりの妹を訪問した際、山高から婦人都会民クラブの事務局の仕事の手伝いを依頼され、生田の勧めもあり、引き受けることになった。婦人都会民クラブ（現・女性都会民クラブ）は山高しげり、市川房枝などが中心となって組織された女性団体で、その後東京都地婦連傘下の団体となった。個人会員で東京都内に住んでいる女性であれば誰でも入会できるクラブ式の気楽な集まりである。地婦連は組織がないと正式な参加団体になれないので、その時は本クラブが受け皿になっている（小林1996）。事務所は日比谷の東京市政会館の中にあり、その事務局員として勤務することになった。これが里子の職業人としての出発点であり、「生涯の仕事となる地婦連への道筋ができた」ことになる。後に里子は、「生田先生は弟子の特性を見極め、私が歌人や教師を夢見るより、婦人運動のほうが適

していると、道筋を付けてくださったのだと思う。そういう意味で私の生涯を決めたのは、生田先生」であると回想している（「徳島新聞」1996. 12. 13）。

このように里子は生田花世と出会ったことが、その後の「地婦連のスポークス・ウーマン田中里子を生む下地になった」（金森 1980）のであり、里子のキャリア形成の起点となったといえる。

2 田中里子と地婦連

東京都地婦連の事務局員へ

GHQ（連合国軍総司令部）は五大改革指令の第一に女性の解放を掲げ、日本の民主化の面から女性問題に強い関心を示し、戦時期の大日本婦人会のような網羅的な官製団体は廃止し、自主的で民主的な女性団体の結成・指導に力を注いだ。その中で、婦人民主クラブ（1946年3月）や大学婦人協会（1946年10月）など各種女性団体が誕生した。その一方で、GHQの方針と都道府県社会教育課の指導の下に、「民主的婦人団体の組織化」が目指され、市町村単位の地域婦人会が急増した（金森 1980）。地域婦人会とは「親睦、隣保扶助を目的とした日本の伝統的住民組織の系譜に属する組織で、会員は年齢、職業、趣味はもちろん、思想、政治的信条を異にしながらも、同一地域の主婦であるということを唯一の共通項として結ばれている婦人団体」（全地婦連 1986）で、目的意識によって結成されている前掲の団体などとは異なる特性を持つ。そのため地域婦人会の会員は参加意識が低く、行動の基準もともすれば最大公約数になりやすいという批判もあるが、地縁、血縁という人間としての根源的な絆を基盤としているだけに、連帯感はきわめて強く、組織の網羅性という特色も手伝って、生活者としての婦人の意向を最も忠実に反映することができるという利点も備えている（全地婦連 1986）。

こうして誕生した地域婦人会は、都市レベル、都道府県レベルで、民主的な連絡協議組織をつくっていくことになる。1948年4月に東京都地域婦人団

II 複合キャリアの形成過程

体連盟（東京都地婦連）が「明るい家庭、住みよい社会の建設」をスローガンに発足し、初代会長に山高しげりが選出された（東京都地婦連 2008）。東京都地婦連は創設当初、事務所を東京都教育局社会教育課内に置いていたが、GHQからの指摘で急遽墨田区東両国の中野ツヤ（後に常任委員）の自宅に事務局を移転させた。移転先には職員がいないため、里子は婦人都民クラブ事務局のある日比谷と東京都地婦連の事務局の置かれた両国を行き来するようになり、まもなく東京都地婦連の事務局員になったのである。これが里子の地婦連におけるキャリア形成の始まりである。

ちなみに同1948年9月に主婦連合会（主婦連）が結成された。会長は奥むめおである。山高は「地婦連は文化運動、主婦連は経済運動」と特色を明確にし、地婦連の活動を内に向けては「明るい家庭の建設」、外に向けては「住みよい社会の建設」を掲げ、初年度は青少年問題に力を注ぐことになった。しかし表向きは文化運動で、青少年問題に取り組むことにしたが、敗戦後の混乱した社会では、生活問題や物価問題のほうが、地域婦人会にとっても重要で切実であった。そのため、地婦連も文化運動にとどまらず、当初から消費者運動にも力を入れることになり、不良マッチ問題を皮切りに、各種料金値上げ反対運動などで主婦連と活動を共にすることも多かった。

全地婦連の結成と事務局員としてのキャリア形成

全国組織結成への強い要望を受けて、1952年7月、全国地域婦人団体連絡協議会（全地婦連）が結成され、初代理事長に山高しげり（東京都地婦連）が選出された。全地婦連は「地域婦人団体の連絡協議機関としてその共通の目的たる婦人の地位の向上、青少年の健全な育成、家庭生活並に社会生活の刷新、地域社会の福祉増進、世界平和の確立等の実現のために、相互の連絡協力を計ること」を目的として、全国19都府県を横に結ぶ連絡協議会という民主的な組織形態の機関として誕生した（全地婦連 1986）。全地婦連が最初に取り組んだのは公明選挙運動で、他に売春防止法制定運動、家族制度復活反対運動、原水爆禁止運動、母と子の桜映画社の設立、新生活運動などに取り

組んでいった。特色ある取り組みとしては、母親たちが株主になった「母と子の桜映画社設立」で、優れた作品の制作と母親たちの映画運動として内外から高く評価された。

全地婦連事務局は東京・港区芝公園の芝児童館に置かれていた東京都地婦連事務局に同居することになり、里子は全地婦連の事務局員も兼務することになった。つまり山高しげりが代表を務める婦人市民クラブ、東京都地婦連、全地婦連の事務局の仕事をほとんど一人で担うことになった。事務局員として消費者運動や平和運動、女性運動などにかかわりながら、キャリアを形成していった。しかし、この時点では地婦連の仕事や消費者運動、平和運動を生涯の仕事とする決断はしていなかった。

キャリア形成の転機

1954年3月1日、ビキニ環礁におけるアメリカの水爆実験により、日本のマグロ漁船第五福竜丸乗組員全員が被爆し、無線長の久保山愛吉が死亡した。この事件をきっかけに日本で原水爆禁止運動が始まり、国民運動として展開されていく。全地婦連も原水爆禁止署名運動全国協議会（理事長安井郁）に正式参加を決定した。会の趣意書には「この運動は原水爆の脅威から生命と幸福を守ろうとする全国民運動であり、さまざまの立場と党派の人々がこの一点で一致するところに重要な意義がある。かかる運動のセンターとなる全国協議会は、一切の党派的、個人的エゴイズムによって汚されない清らかな組織でなければならない」と記された。この協議会が母体となって翌55年に原水爆禁止世界大会が広島で開催された。世界大会終了後、全国協議会は発展的に解消され、新たに原水爆禁止日本協議会（原水協、理事長安井郁）として発足した。全地婦連は原水協に参加し、代表委員に山高しげり、監査・国際会議準備委員に大友よふなど地婦連関係者が就任した（全地婦連1986）。

里子は「全地婦連の仕事をやるようになってからも、私は地婦連にずっといるとは思っていないんです。本当にずっといようと思ったのは、昭和29年

II 複合キャリアの形成過程

のビキニの時あたりからです。その翌年の原水爆禁止世界大会に初めて参加したとき、平和ということに対する志向がたいへん強くなりました」「原水爆禁止世界大会に参加して、被爆者の訴えを聞きまして、こういうことが世界のどこで起こってもいやだ、と強く感じました。そういうことをなくすために私は何かやりたい。地婦連にいればできる、と思いました」(小林 1996)と述べているように、地婦連の平和運動への取り組みを契機に里子のキャリア形成への意識が大きく変化したことがわかる。ちょうどその頃、以前希望していた教師の就職口が見つかったが、すでに教師になる意思はなくなっており、平和問題や生活問題のための運動に関わっていきたいと考えている。これ以降、「仕事を単に事務的にこなすのではなく、自分でテーマを決めてやろう」(小林 1996)と、地婦連の事務局の仕事に意欲的に取り組んでいく。これは里子の師でもある山高しげりの願いに沿うことでもあった。

ここにも里子の戦時下での体験が、時間の経過とともに平和を願う気持ちに重なり、社会の中で平和運動等を実践していくこと、あるいはそれをサポートする役割の自覚につながったと考えられる。

その後東京都地婦連および全地婦連の事務局員として両団体の活動を支え、活動を通して自身のキャリアを積み重ね、1963年に両地婦連の事務局長という要職に就任した。里子は、1986年に全地婦連の事務局長を定年で退職するが、その後も東京都地婦連の事務局長、常任参与として地婦連の活動を継続した。

全地婦連の主な運動と里子

全地婦連の運動は多岐にわたるが、特に力を入れ成果が認められたものに、ちふれ化粧品の開発・販売、カラーテレビ二重価格反対・買い控え運動、原水爆禁止運動の再統一などがある。里子は全地婦連の事務局長としてすべての運動に指導的役割を担うことになったが、以下に『全地婦連30年のあゆみ』や関係者の話から簡単に紹介する。

① ちふれ化粧品の開発・販売と消費者運動の信念

ちふれ化粧品は「値段が高いものほど品質もいい」という化粧品神話への疑問からスタートした。1960年代後半に「朝日新聞」や雑誌『暮らしの手帳』で化粧品の価格差と品質をめぐる記事が掲載され、反響を呼んだ。後者では、大手メーカーの製品と百元化粧品の商品テストの結果、価格が最大で10倍も開きがあるが、品質では大差がないことが明らかにされた。当時百元化粧品は、マージンなどの理由からルートが限られ、一般には入手が困難であった。そこで、全地婦連が百元化粧品の幹旋頒布に乗り出し、その後新百元化粧品のちふれ化粧品の開発頒布、さらには一般市場に進出するまでになった。

1968年8月、会長山高しげりと里子が化粧品メーカーの社長らと会い、提携について話し合われた。提携の基本方針が決まり、その実現のプロセスでは里子が先頭に立って推進した。商品づくりにあたっては、価格だけでなく品質のチェック、成分・分量の表示、色素・香料の無添加、ノンフロンガス、詰め替え商品開発など国内初の取り組みを促すなど、消費者運動家としての信念を貫いている（東京都地婦連・島田 2007）。

② 二重価格表示の実態調査とカラーテレビ買い控え運動

カラーテレビ買い控え運動は、二重価格表示の実態調査に基づいて展開されたものである。1969年10月、全地婦連は公正取引委員会の委託で「二重価格表示の実態調査」を実施した。前年に委員会が出した「価格表示の運用基準」が守られているかが調査の目的であった。翌年8月、全地婦連は調査結果を発表し、定価そのものが不当であり、特にカラーテレビの定価の引き下げ、二重価格表示の禁止を要望した。調査結果はマスコミに公表され、大きな反響を呼んだ。そのうえで、全地婦連は各メーカーが定価引下げを行うまで、全国の会員に呼びかけて「カラーテレビ1年間買い控え運動」を実施することになった。これは消費者5団体（日本婦人有権者同盟、消費者の会、日本生活協同組合連合会、主婦連合会、全地婦連）の運動に発展していった。こうした消費者5団体の団結により、各メーカーが主力の新機種を値下げした

Ⅱ 複合キャリアの形成過程

ことで、買い控え運動は終結した。

里子は調査、運動の中心となって行動し、メーカーの社長との交渉でも調査資料を基に落ち着いた態度で堂々と迫り、後に松下幸之助から「消費者運動を尊重する」と発言させている。この調査や運動は後に公正競争規約の作成にもつながった。調査結果が公表され、反響を呼んだことで、通産省が規約の作成に全面的に協力することになった。3年後に原案が提示され、消費者と業界が意見交換する表示連絡会開催にこぎつけ、里子が消費者側から出席し、消費者にとってわかりやすい表示基準を数多く提案している。たとえば、テレビなどの製造年表示の義務化もその一つである。この画期的な公正競争規約は1978年6月に認定されたが、「最大の功労者」は里子であるとも言われている（東京都地婦連・工藤 2007）。

③ 原水禁運動統一の調整役

里子のキャリア意識の転換をもたらした原水爆禁止運動で、全地婦連が参加し、山高が代表委員になった原水爆禁止日本協議会（原水協）であるが、1964年4月に全地婦連は原水協内部の政治的偏向を理由に会を脱退した。その後、原水禁運動には深い亀裂が残った。1977年にNGO主宰の国際シンポジウム開催を機に、原水禁運動の再統一のアピールが上代タノや中野好夫らによって行われ、全地婦連も原水禁運動の統一実現のために積極的に努力することになった。その結果、原水爆禁止統一実行委員会が結成され、原水禁運動の原点にたちかえり、核兵器全面禁止、被爆者援護などで国民世論を結集し、運動を統一していく方向が目指されている。地婦連は統一大会を支える中心的な団体で、事務局長の里子の果たした役割は非常に大きく、「長く続く大会準備のための会議、それを纏める力量、我慢強さ」が際立っていた（東京都地婦連・福田 2007）。

運動の再統一による原水爆禁止世界大会は成功裏に終了し、78年の国連軍縮特別総会に統一代表団を派遣することになった。総会に向けて核兵器完全禁止の署名運動が全国的に展開された。また、総会前にジュネーブで開かれたNGO軍縮国際会議に日本から74名の代表が派遣されたが、全地婦連から

は里子が参加した。国連軍縮特別総会には「国連に核兵器完全禁止を要請する日本国民（NGO）代表団」（502名）が2,000万人の署名を持って参加した。全地婦連から大友会長、里子ら34名が参加した。里子は日本代表団の事務局長をつとめ、総会のNGOデーには、日本のNGOを代表して核兵器廃絶を訴えた。

里子のキャリアにとって平和運動の中心となる原水爆禁止運動は重要な位置を占める。特に1977年の原水禁運動の再統一以来、運動の統一にひたすら尽力した。市民運動家としてのバランス感覚、優れた調整能力を請われてしばしば調整役を務め、毎年開かれる統一世界大会では運営委員会の議長や責任者を務めるなど、原水禁運動の先頭に立って活動した（東京都地婦連・岩垂 2007）。

3 田中里子の社会活動

里子が全地婦連の事務局長就任以来、事務局長という立場もあり、消費者・生活問題にかかわる数多くの公職を経験し、消費者の立場から発言し、消費者行政にも影響を与えてきた。主なものとして、税制調査会委員、国民生活審議会委員、総合エネルギー調査会委員、公正取引委員会消費者委員、独占禁止懇話会委員、保険審議会委員、国民生活センター運営委員、東京都消費生活対策審議会委員、東京消費者団体連絡センター代表委員などがあげられる。

また、里子はさまざまな消費者運動や平和運動、女性運動に関わってきたが、それはまさに地婦連の取り組んだ運動でもある。「戦後日本の消費者運動史を、地婦連の運動史として、そして、紛れもなく自分史」（東京都地婦連・青山 2007）としてきたといえる。つまり、里子の場合、地婦連での職業キャリアと個人としての社会活動キャリアはほぼ重なっており、複合キャリアはごく自然な形で形成されたとみることができる。

4 田中里子の複合キャリア形成の特徴

上記のような里子のキャリア形成過程を踏まえて、最後に里子の複合キャリア形成の特徴を以下に明らかにしたい。

二段階のキャリア形成

里子の複合キャリア形成は、女性運動家との出会いが起点になり、その後、戦争体験と重なる原水禁運動との出会いが転機となり形成された点に第一の特徴がある。キャリア形成の起点は、敗戦後の自分探しの中で出会った生田花世、生田を通して山高しげりなどの第一線で活動する戦前からの女性運動家たちとの出会いにある。里子は生田と出会い、生田の里子の特性を見抜く力により、生田の人脈を通して国文学の世界から女性運動の世界に導かれたといえる。里子には戦時下の体験を通して国家や社会に対する不信感があり、生田から女性運動に触れる機会を与えられるが、自分の生涯の仕事として納得して受け入れるまでにはかなりの時間を要した。その意味で里子のキャリアは二段階を経て形成されたとみることができる。

第一段階が1946年に山高からの依頼と生田の勧めにより婦人都民クラブの事務局員になってから、48年の東京都地婦連の事務局員、そして52年の全地婦連事務局員になった初期の頃までである。職業人としてのキャリアを積み重ねながら、一方で地婦連の仕事をライフワークとして決めかねていた時期といえる。そして第二段階が1954年以降、原水爆禁止運動が国民運動として展開されてからである。それ以降地婦連の仕事を自分の生涯の仕事と明確に位置づけ、主体的にキャリアを形成していく。このキャリア形成過程をみると、里子の戦争体験が根底にありそれが地婦連での平和運動を契機に生涯の仕事として自覚させたとも考えられる。これ以降里子は地婦連の運動の中核として、公的な社会活動にと複合キャリア形成の充実がみられる。

女性運動家からの学びによるキャリア形成

里子のキャリア形成に大きな影響を与えたのは、前述のように生田花世をはじめ、山高しげり、市川房枝などの女性運動家たちである点が第二の特徴である。

生田花世は前述したように、里子のキャリア形成の起点となった人物で、里子の特性が歌人や教員にではなく、女性運動に適していることを見出し、社会勉強と称して積極的に女性運動家たちに紹介し、その後の活動への道筋を付けた。

山高しげりは戦前期からの女性運動家であり、里子の生涯にわたるキャリア形成に最も大きな影響を与えた人物である。婦人都会民クラブの事務局を手伝うようになってから、山高が亡くなるまでの32年間、「とにかく先生のもとで一から教わっていった。その年月の積み重ねのうちに、地婦連という全国の町や村の地域を基盤とした婦人の大衆組織への愛着が、次第に私の心の奥底に根を下ろしたようだ」（「毎日新聞」1957. 9. 20夕刊）、「山高さんの下で働いているうちに、自分の生きる道と地婦連の運動が重なるようになりました」（「日本経済新聞」1961. 2. 26夕刊）と述べているように、山高は直属の上司であり、里子の職業キャリア形成の実践的、精神的な師であり、指導者であった。山高の女性運動は「真っ先にかけて突進する方法ではなく、またイデオロギーにおぼれて現実を忘れる在り方」ではなく、「日常のくらしのなかから、しっかりと芽ばえてきたものを大切に、一人ひとりの心を支えながら、ともに進むという方法」（全国婦人会館女性史研究会・一番ヶ瀬 1982）で、それは里子の消費者運動や平和運動に受け継がれた。またそのための努力を惜しまない山高の生き方そのものが里子のロールモデルになったと思われる。

市川房枝も里子が影響を受けた女性運動家の一人である。1946年の初の女性が参政権を行使した総選挙に女医の竹内茂代が立候補し、里子はその選挙運動を手伝った際に、応援に来た市川に初めて出会った。山高と市川は共に闘ってきた仲間であり、「愛する友」でもあった。里子は市川について「外

Ⅱ 複合キャリアの形成過程

野席の最前列にはいつも市川先生の顔があった。あの笑顔で見守ってくれる、何かことあれば駆け込める安心感とでもいったもの……直属の会長とはひと味違い、ちょっと距離があるだけに仕事抜きで甘えられる人と、いつの間にか私は勝手に市川先生をそう決め込んでいた」。また、「大所帯で決断のおそい地婦連をとときには先生流に批判しながらも、私にそっと『でも組織にムリは禁物だから……』と細かい心づかいをみせてくれた」（「京都新聞」1956. 2. 14）市川は、里子のキャリア形成を間接的に支え、「おふくろ」のような存在（同前）で指導した人物といえる。

里子は、これらの女性運動家から運動のノウハウだけでなく精神面でも多くを学び、自身のキャリア形成に活かした。

団体間の連携を基盤にしたキャリア形成

里子が亡くなった翌月の2007年4月にお別れの会が開かれ、『田中里子さんへの手紙』と題する小冊子がまとめられた。その冊子には生前親交のあった95人から里子への手紙が収録されている。手紙の差出人は女性団体、消費者団体、平和団体の仲間が多いが、他にも企業や行政の関係者、弁護士、ジャーナリスト、大学教員など多彩である。里子の人脈の広さは、まさに活動の幅の広さ、さらにそれを基盤にしたキャリア形成過程を物語っている。

「地婦連の活動は、会員と事務局との協働によって行われており」、里子は事務局長として大きな役割を果たしてきたこと、さらに「地婦連の活動を、その団体内部だけの活動に限定」することなく、「他の女性団体や消費者団体との連携を深め、広げる役割」を果たした（東京都地婦連・神田 2007）ことが評価されている。平和運動では、団体間の対立する場面で、公正・中立の立場で取りまとめの中心として、粘り強い調整能力とバランス感覚で国民運動としての統一に努力してきた。つまり里子のキャリア形成は地婦連の活動を、消費者利益のため、あるいは平和のために団体間の連携とネットワークづくりを基盤にして発展させたところに大きな特徴がある。

最後に、里子は1963年にジャーナリストの田中義郎氏と結婚し、より高い

理想と幅広い社会観をもつようになった（東京都地婦連・川島 2007）とされ、キャリア形成にも影響したことが推察される。

おわりに

以上、田中里子の複合キャリア形成過程を主に地婦連での活動を通して検討してきた。女性運動とは全く縁のなかった里子が、女性運動家との出会いから、全国の地域を基盤とした女性の大衆組織を横につなぐ全地婦連の事務局員になって、その活動を会員とともに支え、生活や平和の観点から他の女性団体や消費者団体などとの連携により運動を広げ、社会的な運動に発展させるまでになったのである。つまり、キャリアを積み重ねる中で「自分の生きる道と地婦連の運動が重なる」ようになったのであり、里子の複合キャリアは段階を踏みながらも生涯をかけて形成されたといえる。

社会が急激に変化し、女性の社会進出も進みその生き方もより多様化する中で、女性自身のキャリア形成に対する関心も高まっている。田中里子の複合キャリア形成過程は地婦連とともにあるが、それは敗戦後「自分がいいと思う仕事でなければイヤだ」という思いで求め続けた結果でもある。その意味で、今後の女性の複合キャリア形成の一つのモデルになると思われるのである。

引用文献・資料

国立女性教育会館 2008 Fact Sheet 「女性の高等教育の黎明——チャレンジした女性たち」

小林嬌一 1996 「日本の消費者運動史 地婦連の歩みと田中里子」『月刊消費者』437 44-49

芳賀登他監修 1998 『女性人名事典』日本図書センター

金森トシエ 1980 『人物婦人運動史——明治・大正・昭和のあゆみ』労働教育センター 92-102

Ⅱ 複合キャリアの形成過程

全国地域婦人団体連絡協議会 1986『全地婦連30年のあゆみ』14、21、40-41

東京都地域婦人団体連盟 2007『田中里子さんへの手紙』

東京都地域婦人団体連盟 2008『東京地婦連60年のあゆみ』

山高しげり著 全国婦人会館女性史研究会（一番ヶ瀬康子他）編 1982『わが幸はわが手で』ドメス出版 237-238

（まばし・みちこ 日本女子大学教授）